

他者としての「言葉」

―東日本大震災後の言説状況と戦後批評を巡る試論

森岡 卓司

1 瓶の中の手紙

斎藤環は、岩波書店ウェブ連載「3・11を心に刻んで」において、パウル・ツェランの「ハンザ自由都市ブレーメン文学受賞賞の際の挨拶」を引用し、「語ることの空しさ」とらわれようとする「あなた」にむけて、「言葉」への希望を語った。

ツェランはある詩人の比喩を借りて、言葉を「投瓶通信」にたとえます。誰かが叫び、語り、あるいは書きつけた言葉は、いつかどこかの浜辺にたどりつき、そこで「あなた」に「現実」をもたらすでしょう。ここで「あなた」という言葉は、どこかにいる他者だけではなく、「未来の自分」をも意味しています。そう、言葉とは、多様な「あなたの現実」の豊かさを取り戻すために投じられ続ける、瓶の中の手紙なのです。

だからこそ、今、言葉の無力を嘆くことはありません。語ることの空しさにうちひしがれる必要はありません。

私たちの日常も、私たちの喪失も、すべて言葉が支えています。いかなることが起きようとも、真の意味で、言葉が失われることはありません。私たちは言葉とともに生き延びる。言葉が私たちを励まし、私たちをして語らしめ、さまざまな「活動」へ、「出来事」へと向かわせる。そういうものであり、そうなるほかはないのです。これから私たちは、言葉を取り戻さなくてはなりません。(1)

文学の歴史上最も美しく厳粛なイマージュのひとつである「投瓶通信」に寄せて宣言される「言葉」への揺るぎない信頼は、震災直後に表明されたさまざまなメッセージの中でも、最も力強く、確信に満ちたもののひとつであった。そして、斎藤がそうしたことを語り得たのは、勿論偶然ではない。

二〇一一年三月に広がった光景は、確かに、「言葉を失う」ほかないものであった。それは空前絶後と言ってよいような、一回的な事態であつたけれども、同時に、斎藤にとつては、既に見知った、そしてそれ故に何も言わずに通り返ることが出来ない類の事態でもあった。というのも、『文学の断層 セカイ・震災・キャラクター』（朝日新聞出版、二〇〇八・七）に拠れば、彼の批評活動は一九九五年一月の阪神淡路大震災に端を発していたからである。

斎藤が批評家としての自身の出立を確認する営みは、大塚英志の次のような議論を批判的に踏まえることから始められていた。

つまり「文学」が「現実」との関わりを失ったという不安感が「危機」の基調にあり、だからこそ、偶然、彼らの爪先に触れた「14歳」という「現実」に強引に足場を作り上げてしまった。しかしそれは密室殺人や殺人ゲームという手法を採用することでしか「神戸」を描きようがないと自覚するところから出発した非文学的な書き手と全く正反対の態度であることはいまでもない。非文学的作者たちの手法は徹底して「現実」から離れていったが、しかし、そのようにしてしか描けない「現実」の所在を示した。しかし村上や柳は本来彼らの主題ではなかったはずの「圧倒的な現実」と自身の小説を結びつけずにはおれない。そうしなければ彼らの小説の存在意義が立証できないかのようである。(2)

大塚がここで指摘しようとしたのは、震災で決定的に崩れた「現実」に物語の「言葉」が関わろうとする三つの姿勢である。大塚によれば、サブカルチャー作品は震災を「現実」から徹底的に離れることで描き、「村上や柳」ら「文学的」作者は「現実」

と離れた文学に耐え得ず、つい最も不得手であったはずの作風に手を伸ばした。大塚は、柳をその屈託において、村上を「私」への固執からの離脱においてそれぞれ肯定的に評価し、そこに「自然主義的リアリズム」更新の契機を見ようとしている。その一方で、大塚がここで批判のやり玉に上げるのは、震災という「現実」を描くこと、崩れた「現実」とかわり合うことを避けて、「14歳」事件すなわち神戸連続児童殺傷事件に飛びつき、少年犯罪という手慣れた題材で「神戸」の「現実」を籠絡しようとした作家たちであり、中でも、それを伝統的な「私小説」の身振りで本質化した車谷長吉であった。

この大塚の指摘、及びそれに向けられた笠井潔の批判（『探偵小説と記号的人物』東京創元社、二〇〇六・七）を踏まえた上で、斎藤は独自の「神戸震災文学論」を展開する。斎藤は、大塚のいう「文学」が「現実」との関わりを失ったという不安感を「リアル病」と言い換え、その社会的広がりをも認めつつも、ラカンを経由した「リアリティ」の議論、すなわち「欲望は他者の欲望」であり、「リアリティへの欲望」とは「リアリティへの他者の欲望」を欲望することに他ならない」ことを自らの論の前提とする。従って、大塚が前提とする「現実」に拮抗する虚構「圧倒的な現実と結びつこうとする文学」という対立構図は、それ自体、「現実」をアプリアリなものと思える「リアル病」の一症例と考えられる。そうではなく、リアリティの

起源を間主観的な欲望に求める斎藤の関心は、震災によって露呈した「現実」の乖離的な分裂を接合しようとする「言葉」のありさまそのものへと差し向けられた。

震災という「現実」に傷ついた言葉が、言葉だけで自律する虚構空間を構築しようとする一方で、実用性を徹底しつつ個人を救済しようと試みること。今や私は、その意味を、自らの経験として語ることができるように思う。

なぜ私は実用の言葉で「ひきこもり」を語り、その一方で観念的な批評の言葉を語らずにはいられなかったのか。これまで私はその「乖離」を、単に個人的な欲望としてしか説明できなかった。

しかし、今にして私は思う。それはまぎれもなく「言葉のリハビリテーション」だったのだ、と。自らの語る言葉を、抽象と具象の両極へ向けて、ストレッチ体操のように引き延ばしたい。この由来のわからない衝動こそは、「言葉という他者」が回復へ向かおうとする過程で、私に課せられた一つの欲望だったのだ。(3)

斎藤は、阪神大震災後の文学潮流を関東大震災後のそれになぞらえながら、現代ミステリ・ライトノベルを含む、虚構空間の分裂を極限まで推し進めようとする作品を新感覚派に対応す

るものと考える一方、トラウマ系の文学をプロレタリア文学にやがて連なるものと措定する(4)。その上で、その双方をとともに、言葉の失調によって従来のリアリティが失われた結果生じた乖離的な世界から、直接あるいは間接に回復しようとする、「言葉のリハビリテーション」として把握する、というのがここで彼の提示する構図である。

「言葉」によってのみリアリティは媒介されるのだから、どのような「現実」も「言葉」から分離したものとしては考えられず、その逆もまた同じである。この基本的な前提が、二〇一一年に書かれたエッセイにまで敷衍されている。冒頭に引用した箇所にある、「私たちの日常も、私たちの喪失も、すべて言葉が支えてい」とは、この意味において理解される。

この斎藤の文学史記述は、サルトル(とブレヒトと)を手厳しく批判したアドルノ(5)の次のような一節を直接的に想起させる。

問題となっているのは、作家が現在において (dans le présent) アンガージュすることである。しかしながら、どのみち作家がそのことから逃れることなど不可能である以上、いかなるプログラムも選り好みすることはできない。作家が負っている義務とは、それよりはるかに厳密なものである。それは、決心をする義務ではなく、物事そのもの

からくる義務なのである。(6)

消費社会における「芸術のための芸術」と「アンガージュマン文学」との対立関係の逆説的な補完性を厳密に論じようとするアドルノは、サルトル的な「決心」の身振りが持つ欺瞞性を批判しつつ、「物事そのもの」に義務を負うことを免れ得ない文学のあり方に言及する。恣意的な「決心」の有無にかかわらず、「むきだしの身体的苦痛」という「経験的現実」の中に「享樂を絞り取るような可能性」は必ず残り、「経験的現実」から距離を取ろうとする「芸術のための芸術」はそれ自体の存立基盤において「経験的現実」に必ず媒介される。「現実に対する作品そのものの身振りであるようなある種の意志」と「作品の自律性」とには強固な「関係」があり、それは決して解かれることがない。

このアドルノのパラドックスを用いて、冒頭にひいた斎藤の「そういうものであり、そうなるほかはない」という断言をパラフレーズしてみよう。「言葉」による媒介なしに「現実」に出会うことは不可能であり、同時に、「現実」から独立した「言葉」を用いることもまた不可能である。だから、「言葉」で「現実」を救おうとすることも、「現実」によって「言葉」が奪われると考えることも、一時的な失調、「リアル病」に伴う錯覚に過ぎない。「あなた」の恣意や感慨とは関わりなく、「言葉」

は、「あなた」に「現実」をもたらす他者であり続けるだろう。

このようにして、斎藤は、一九九五年を起点とした自らの批評活動「リハビリテーション」を振り返りつつ、二〇一一年三月以降にも「言葉」は失われないと宣言した。そこには、批評家が自らの営為を通じて追求し続けている「言葉」、そして「文学」を巡る原理的な思考がある。それは読むものを立ち止まらせ、近代批評の豊かな水脈へと誘うだろう。

しかし、東日本大震災発生のおよそ二ヶ月後に行われたこの斎藤の宣言にも関わらず（あるいは宣言通りに）、「言葉」の失調は、「リアル病」とはまた異なる位相で、やはり現に生じたように思われる。本稿は、戦後文芸批評史上のさまざまな議論との重なりに留意しながら、その様相を記述しようと試みる。

2 当事者性を巡る抑圧

斎藤のウェブ連載と同じ単行本に収録された、漫画家こうの史代のエッセイには、東日本大震災後の「言葉」の閉塞の典型的な様相を確認することができる。

代わりに、「我々はまだまし」という言葉を多く聞いた。津波の来なかったところは来たところと比べて。原発事故に巻き込まれた町と比べて。死んでしまった誰かと比べて。

て。

きつと死んだ後にも、あっさりか、苦しんで死んだか、そんな比べ合いがあるのだろうか。

こうしてどこまでも、仕切りを作って、まだましな「外側」の人間だと思おうとしてしまうのだろうか。「内側」の人への同情をもって、がんばっている自覚のないまま、がんばろうとしてしまうのだろうか。

でも、「外側」になつてみないと判らない事だつてある。

「外側」に伝わらなくては意味がない事だつていくつも
ある、とわたし達は知っている。

心を澄ましておこう。

「内側」から囁かれる何かを、「外側」の人間として、
ひとかけらずつ受け取ってゆこう。

そしてもっと「外側」の誰かへ、「内側」の人間として
伝えようと思う。(7)

災害の「内側／外側」の断絶がこののの嘆息を誘う。しかしそれは、実体的なものであるというよりも、事態の「外側」であると自らを見なすことによって、自らの「同情」を倫理的に抑圧し、自閉していいこうとする人々の姿である(8)。被災状況

の多寡を倫理的な階層として内面化しようとするこうした言説は、震災下にあつて、決して珍しいものではなかった。

⑤ ##### 福島に行くと、「宮城や岩手の津波被害に比べたらこっちなんで申し訳ない」といわれる。翌日、岩手に行くと「福島原発事故の被害に比べたらうちなんて申し訳ない」といわれる。どちらの被災者も、なんて奥ゆかしいのだろう。(二〇一二年九月一日―二〇一二) (9)

これは震災から一年以上が経過した時点で、あるボランティア従事者がソーシャルネットワークサービス「ツイッター(Twitter)」に投稿したつぶやきである。どのエリアの「被害」がより甚大であるかを客観的に測定することは不可能で、またそうする意味もない。そうではなく、「こっちなんで」「うちなんて」という階層のフィクショナルな内面化こそが本質的なのだ。これはもちろん特別なつぶやきではない。類似するような感慨はいたるところで漏らされ、またこの「奥ゆかし」さは、「日本」の本質的な特殊性、美点として称揚されもした。

高橋ジョージ 僕は被災地へ行ってきましたが、被災された人といろんな話をしてきました。その人たちは、「私たちはまだ生きているからいい。生かされている。だから、

もつと悲しい人たちがいるから、そつちを助けてください」と必ず言うんですね。その言葉からは、もう政府がどうか、好きだとか嫌いだとかを越えた人間としての思い、そして私たちは亡くなった人たちの分まで生きようという思いが僕には伝わってきました。(10)

この発言は、マイケル・サンデルによって「国の伝統の中に自己犠牲的な精神が存在する」と実定化され、それは石田衣良らによって、より近いコミュニティに対する忠誠心として再定義された。ここで、死という「事実」は死という「観念」へと昇華され、総ての個の内面を超越的な審級から規定する。こうした階層化のフィクションは、悲惨な状況下に見放された個の内面から支え励まし、その反面權威の責任には無批判な、ある意味で理想的な共同体のエートスを形作るだろう(11)。

しかし、こうした「コミュニティアン」的な倫理観が現在の日本にも受け継がれていた伝統だった、と言われて、それを素直に諾うこともまた難しい。なぜなら、我々が見ていたのは、次のような「文学」の風景だったからだ。

宇野常寛は、二〇〇〇年代の文化的なコンテンツの基盤をなす社会意識、「新しい想像力」を、世代論的な枠組みのもと、以下のように描き出してみせた。

世の中のしくみ、つまり「政治」の問題としては、小泉構造改革以降の国内社会に「世の中が不透明で間違っているから何もしないで引きこもる」という態度で臨んでいたら、生き残ることはできない。自己責任で格差社会の敗北者を選択したと見做されてしまう。

そしてこの「ゲーム」は現代を生きる私たちにとって不可避の選択であり、「ゲームに参加しない」という選択は存在しない。この資本主義的経済と法システムによって組み上げられた世界を生きる限り、私たちは生まれ落ちたその瞬間からゲームの渦中にある。

また個人の生き方、つまり「文学」の問題としても、社会的自己実現を拒否し、「何も求めない」ように見える碇シンジが、その一方で自分を無条件に承認してくれる存在を求めているように、「何かを選択すれば必然的に誤るので、何も選択しない」という態度は、実は成立しないのだ。

二〇〇一年を前後して、九〇年代にはかつてのシステムが無効になった衝撃によって覆い隠されていたポストモダン状況の本質とも言うべき構造が露になった。その本質とは、人々はもはや歴史や国家といった「大きな物語」に根拠づけられない(究極には無根拠である)「小さな物語」を、中心的な価値として自己責任で選択していくしかない、という現実である。それを受け入れなければ「政治」の問題

としては生き残れず、「文学」の問題としてはそもそも「何
も選択しない」という立場が論理的に成立しないのだ。

(12)

東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』
(講談社現代新書、二〇〇一・一一) が、「いまや感情的な心の
動きは、むしろ、非社会的に、孤独に動物的に処理されるもの
へと大きく変わりつつある」と、「大きな物語」＝共感が必要
としないデータベース型世界の到来を宣言し、文学、というよ
り消費コンテンツが「プロザックや向精神薬とあまり変わらな
い」ものであるとしたことは、先註において触れた中村光夫『風
俗小説論』、そして大塚英志「神戸震災文学論」に即して言う
ならば、私的な内面の「物語」を描くことが何らかの共感的な
真実に通底するという「私小説」的文学観への破産宣告でもあつ
た。しかし、社会的に無根拠な内面の「小さな物語」を描くコ
ンテンツが次々と代替わりして後を絶たず消費され続けるのは
なぜか。

そういう問いかけに答えようとする宇野は、先に引用したア
ドルノのアンガージュマン批判によく似た逆説で「社会」と「動
物」とを結び直す。「物事そのもの」ではなく、「小泉構造改
革以降の国内社会」のネオリベリズムからの「義務」を負っ
た「動物」は、過誤を承知で、あえて「小さな物語」を選択せ

ざるを得ない。なぜなら、「動物」こそ、リベリズムに媒介
された産物なのだから、というわけである。その論理のパラド
クシカルな特徴は、「自己責任で選択」「していくしかない」と
いう撞着した語法に端的に示されている。

しかし、宇野に対して、あえて今一度こう皮肉を言うことは
許されるだろうか。なぜ「しかない」のか。「サヴァイヴ」す
ることを正当化する論理とは何か。手段の真偽や善悪を超えて
「サヴァイヴすることは正しい」という「大きな物語」だけは
まだ真実であり続けていたのだろうか。

もちろん、「自己責任」の論理は、敗者を容赦なくゲームか
ら追い出すのだから、そこに「大きな物語」の共有などあり得
るわけがない。そうではなくて、ここに働いているのは当事者
性の論理(13)である。ゲームのプレイヤーはお互いに「物語」
を共有しない。しかし、ゲームのプレイヤーであることを強制
された当事者である限りにおいて、無根拠な「物語」を選択す
る行為それ自体には意味がある。互いの「物語」の意義までは
理解できない、そのことが理想的ではないと知っているけれど
も、それは強制されている立场上仕方がない。宇野のいう「新
しい想像力」について回るナルシスティックなヒロイズムの匂
いは、この孤独な行為に対するメタレベルからの自己憐憫に由
来する(14)。

セカイ系コンテンツを擁護する笠井潔もまた、こうした当事

者性の論理を軸に議論を展開していた。

前田晶は「飛躍の論理」(『文学界』二〇〇五年三月号)で、「私が世界と直結するという『セカイ系』という『ギブン』もまた、厳然と存在する中間領域に目をつぶることによって、はじめて成り立つものでしかない」、それは私と世界のあいだに「構造として存在するはずの経済や歴史の問題をいっさい描かない選択、つまるところは書き手の恣意的な『関心』に従属する選択なのだ」と本質主義的な批判をしている。「書き手の恣意」に「経済や社会の問題」が先験的に優位すると、どうして前田は信じていることができるのだろうか。「経済や社会の問題」は、私の個的で恣意的な世界にリアルなものとして浸透して、はじめて「問題」になる。

最終兵器に人体改造されても基本権の侵害として抗議の意志を持つこととさえない少女は、「経済や社会の問題」に無自覚な啓蒙の対象にすぎないのだろうか。大塚英志も前田と似たような非難を「ライトノベルズ系文学」を標的に繰り返しているが、これらの論者は「経済や社会の問題」が構成されるにすぎないことを忘れている。(15)

現象学的な独我論、というよりもむしろ、『風俗小説論』の

ひそみに倣って、日本浪漫派の再来ではないかと言いたくなるようなロジックであるが、実はこうしたロジックは「政治と文学」論争の最終局面で奥野健男が主張した「文学の自由」論にきわめてよく似ている。奥野は、「政治を外のもの、文学の外にある権威あるもの、既に決定された存在倫理的良心としてしか受けとることができない」という「信仰」を批判し、三島の「美しい星」を評価して「政治を自分で考え、実験し、表現し、架空世界に実現し得る自由が、再び文学者の手にもどったのだ」とその画期的意義を絶賛した(奥野健男「政治と文学」理論の破産、『文芸』一九六八・六)。しかし、「政治」が「もどった」のはあくまで「文学者の手」にであって、その自由はあくまで「文学者」という当事者性の内部において言祝がれる。ではその「文学」の中に囲い込まれた「自由」な「政治」がいったいどれほどの意味と広がりを持ちうるのか、という疑問は、「文学」という「大きな物語」を無条件に信じ得た奥野にとっては必要がないものだった(16)。

そして、こうのが嘆いた断絶と抑圧、そして自閉は、この当事者性の論理が横滑りすることによって生じる。そのことを、戦後日本の批評の問題として指摘し、また皮肉にも自ら体現したのは、佐々木俊尚『当事者』の時代(光文社新書、二〇一二・三)である。

佐々木は、実際は〈夜回り共同体〉の「インサイダー」であ

りながら、〈総中流社会〉の「アウトサイダー」からの視線を享楽として供給できると信じて疑わないマスメディアの報道姿勢を〈マイノリティ憑依〉と呼んで批判し、その起源をベ平連運動、そして「華青闘七・七告発」を経由する一九六八年以降の言論状況に求めようとする。佐々木の歴史把握はきわめて明快である。一九五〇年代までの、戦争体験者がマジョリティであった時代、すなわち〈被害者〉の時代はやがて過ぎ、六〇年代になると、社会運動に関わる必然性を担保するために、被害者であると同時に加害者でもあるという〈被害者＝加害者〉論の時代が到来する。そこでは〈在日〉や「女性」という「内なるマイノリティ」への視線がもたらされたが、しかし、やがてその加害者性への批判は〈オーバードーズ〉を招き、加害者性を糾弾するために、あるいは享楽するために、いつでも被害者の視座に立てるといふ〈マイノリティ憑依〉が生じる。その結果、日本社会の言論は閉塞し、それは東日本大震災を機に遂に臨界を迎えた。

東日本大震災とそれに続く福島第一原発の事故が明らかにしたのは、この〈マイノリティ憑依〉が実は日本社会の集合的無意識を浸食しているということだった。決してマスメディアだけの問題ではない。

「被災者の前でそれが言えますか」という発言。
あるいは、福島の子の気持ちを勝手に代弁する多くの
人たち。

しかしこのような人たちを、「当事者であれ」と批判することはできない。なぜならそのようにして他者に当事者であることを求めるといふ行為自体が、すでに当事者性を帯びていないからだ。本多勝一に南ベトナムの解放区の村の幹部が語ったように、「日本人が自分の問題で、自分のためにアメリカのひどいやり方と戦うこと、これこそ、結局は何よりもベトナムのためになる」のだ。他者に「当事者であれ」と求める前に、まず自分が当事者であることを追求めるしかない。(17)

しかし、この佐々木の議論は、用心深い断り書きにも関わらず、あるいはその「自戒を込めて」とでもいふべき身振りによつて、完全な「ブーメラン論法」になっている。「〈マイノリティ憑依〉は不当であるから当事者であるべきだ、しかし当事者であるべきだ」といふ言明も当事者としての立場から行われるべきだ、という言明も当事者という…、この無限後退は原理的にいつまでも続く。言明の内実は空無化し、発話の形骸だけが誇らしく示され、「言葉」は失われる。こうした「言葉」の失調

こそが、「コミュニティアン」的な倫理観と呼ばれた態度の裏面を成していた。佐々木はこれに続けて言う。

これは堂々めぐりのパラドックスにも聞こえる。しかしこの壁を乗り越えていかない限り、その先の道は用意されない。しかしその壁を乗り越える人は限られているし、乗り越えない人や乗り越えられない人に対して、誰も手を差し伸べることはできない。

なぜなら、誰にも他者に対して道筋を用意することはできないからだ。自分自身で当事者としての道を切り開ける者にのみ、道は拓かれる。(18)

二〇一一年三月以降の「言葉」の失調は、このようにして生じた。

ポストモダン以降の言説状況において、当事者性のみが物語への欲望をオーソライズできるものと見なされた。従って、その当事者性という賭け金を、他人の懐からこっそり拝借することとは重大な詐欺である。自らの賭け金で勝負するべきであり、もし懐が空になったのならば、素直にゲームから退場するべきだ……。

震災後に連発された「絆」や「がんばろう日本」といった類いの言葉が、時として驚くほど空疎に響いたのは、こうした、

互いが当事者性を賭け金としたゲームの中にいるという感覚のためではなかっただろうか。自分はいかに当事者足り得ているか、リアリティはそのフィクションにしかない、というのがそのゲームのルールである。

3 戦後的な主体の臨界

ここまで確認してきたような「言葉」の閉塞は、福島第一原子力発電所事故を巡る言説に最も端的に現れた。それには、原子力発電というテーマが帯びるイデオロギー性や、いわゆる「原子力ムラ」の利害関係など、複数の要因が絡み合っているが、ここでは、自らの批評的営為の根幹に関わる体験としてそれに言及した加藤典洋のテキストを検討したい。

原発事故とは何であろうか。その深刻な展開に海外で接し、私に最初にやってきたのは、これまでに経験したことのない、未知の、悲哀の感情であった。その感情は、今回の惨事が人間を含む自然全般を深く汚染・毀損することを通じて、私をスルーして、いわば次代を担う人々、若い世代の人々、これから生まれてくる人々をターゲットにしていることから、来ていたように思う。大鎌を肩にかけた死に神がお前は関係ない、退け、とばかり私を突きつけ、若

人々、生まれたばかりの幼児、これから生まれ出る人々を追いかけて、走り去っていく。その姿を、もう先の長い人間個体として、呆然と見送る思いがあった。(19)

加藤典洋は、東日本大震災に伴う福島原発の事故に関わって、「突き飛ばされ」「スルーされた」悲哀の感覚を繰り返して述べている。汚染・毀損の対象ではないことが、かえって悲哀の感情を惹起する。これほど雄弁に当事者性論の限界を物語る言説はまたとない。

そして、加藤にとってこの感覚は、自らの批評的営為の再構成を強いられるほどのインパクトを持った。なぜなら、佐々木が先の論の大きな源泉として掲げてもいた『敗戦後論』（講談社、一九九七・八）において、彼が提起していたのが、戦後の当事者性をいかに立ち上げるのか、という議論だったからである。

自分はこれまで、将来のことを考えるにもまず過去との関係をしっかりと築くことが必要だと思ってきた。そしてそのことを人に対しても述べてきた。「戦争の死者」との関係をどのように築くか、という問題、あるいは、憲法九条をどう考えるべきか、というようなことです。

しかし、今回現れたのは、自分の関与したことの結果、

自分が十分に背負いきれない災禍がもたらされ、それが、自分とは関わりのない人間、次代の人間に、手渡されるという問題でした。(20)

『敗戦後論』を踏まえつつこのように述べる加藤は、この「背負いきれない」感覚を、社会学者ウルリッヒ・ベックの「リスク近代」の概念を援用して説明しようとする。ここでの加藤の議論に特徴的なのは、この「リスク」の概念を、法刑罰と同様のフィクションのレベルで捉えている、という点である。「法とは、ほんらい弁済可能でないものを、別の形でフィクションとして、支払い可能な形に置換し、各人がそれを納得し、受け入れる虚構」だと定義する加藤は、そのアナロジーを用いて、原発事故によってあらわになった「リスク近代」の臨界を、「本当の問題は、ここに起こっている事態が、電力会社にも国にも、応答できない、「責任」をとれない規模のことだ、ということのほうだった」(21)と説く。すなわち、原発事故で露呈したのは、構成員の誰もが当事者でありえないような社会の現出だった、というわけである。この意味で、加藤のいう「背負いきれない」感覚とは、コミュニケーションを支える象徴的秩序の崩壊、とも換言できる(22)。

加藤は、こうした亀裂、「言葉」の失調を認識しつつ、しかしそこからの回復を関係の「固有性」の奪還に賭けようとする。

この後現れる赤ん坊と私を結びつけるのは、この私の「手渡す」自然の毀損であり、放射能汚染です。ここに現れる未来の赤ん坊は、いわば私の隣りにやってくるだろう、未来の隣り合う人、隣人なのです。そのことが意味するのは、むろんナシヨナリズムなどではない。チェルノブイリの子どもたちは、遠いが、福島の子どもたちは近い、ということではないのです。そうではなく、そこには「関係」のもつ固有性が、つねにある。その固有性の中で他者は、隣人となる、ということです。両者をつないでいるのは、「この」自然の毀損、「あの」自然の損壊で、それは何ら抽象的なものではない。抽象的なものは、損壊できないのです。その自然は、観念ではなく、現にここによれて、深く毀損して、手に触れられるものとしてある（手をふれば、汚染が及ぶのですが）。（23）

「未来の世代一般に対するリミットの無い」「貧血的な倫理」を退けようとする加藤は、例えば地球環境の南北問題についても、単なる「一部良心派の「利他的なふるまい」は「内在性」を欠いた弱いものでしかない」と批判する。そうではない、「内在性」に基づいた「赤面するように」「暖かい」「有責性」をもたらず契機として、隣人との関係の「固有性」が、ここに要請されることになる。言うまでもなくこれは、『敗戦後論』にお

ける、「自国の戦争の死者」への哀悼から「他国の戦争の死者」へ、という順序へのこだわりと論理的に連続している。『敗戦後論』に差し向けられた数々の批判に対する粘り強い応酬において改めて確認されたのは、倫理の「抽象性」への批判こそ、加藤にとって手放すことの出来ない批評的なモチーフである、ということだった。

しかし、ここでの加藤の論理は、未だ当事者性論の限界を乗り越えるには至っていない、とも言わねばならない。隣人との関係が毀損され得ること自体を、その関係の持つ固有性の顕現と見なし、その固有性によってコミュニケーションの失調を克服する、という議論は、きわめて示唆的ながらも明らかに撞着的な要素を含んでいる。「赤面するように」「暖かい」「毀損」の感覚もまた、「抽象的」なフィクションに媒介されて主体にもたらされる「関係」にほかならず、その「関係」の失調こそが問題だったのではなかったか。

4 主体の「死」と他者としての「言葉」

本稿においては、東日本大震災の直後に斎藤環が語った「言葉」の失調とその回復への希望について、「文学」と「現実」との関わりを巡る批評的文脈を確認することを起点とし、その後の言説状況の中で、当事者性を巡る倫理的抑圧として「言

葉」の失調が生じた様相を、佐々木俊尚、加藤典洋の二人の批評テキストを中心に検討してきた。「風俗小説」論からポストモダン文学に関する議論に至るまで、戦後日本の文芸批評を巡るさまざまな文脈と重なりあいながら生じたその失調は、コミュニケーションを支える象徴的秩序の臨界として現れたと考えることができる。

戦後詩を巡る酒井直樹の次のような考察は、こうした事態を理解するための重要な補助線を提示している。戦後詩における「死」が「共同的表象」にもたらす批評的な契機を二点にわたって指摘しようとする酒井は、「死」の表象不可能性、表象に対する絶対的な他者性について触れた後、次のように述べる。

第二に、それは共同的表象の作用の基本的メカニズムを明らかにするという意味で危機的^{クリティカル}である。発話行為の主体と被発話態の主語の分裂は、主体の死をも意味するのだが、これまで私が論じてきたように、それなくしては自らを主体として定立することが出来ない基本原理なのである。だから死は二つの事実を同時に明らかにするのである。つまり、共同的表象体系がそもそも機能するために、当然それは一方で分裂を招来し、発話行為の主体を表現の中から排除する。これはつまり体系のなかで確定された主体の位置と自分自身とを誰も同一視できないことを意味する。

他方、その体系の本来性そのものは、発話行為の主体と被発話態の主語の間に想像上の対応関係があり、しかもそれが十全な (adequate) 対応関係と思われているという点とと、主体は常にならば矛盾的自己同一としてしか定立されないという事実が隠されているということに依拠しているのである。しかしこの意味での十全性は、言表の際に必然的に生ずる損失、消失および死が隠蔽されている限りで認められ得るだけのものののだ。(24)

「共同的表象体系」における「発話行為の主体と被発話態の主語」との「対応関係」、つまり主体の定立にかかわる「言表」に、常に「損失、消失および死」が介在しているというこの酒井の主張を、本稿の文脈に置き直すならば、それは、真正な当事者性を記述することはついに不可能である、という示唆として理解し得る。酒井によれば、こうした主体の「死」を隠蔽するウェルメイドな物語は、現存の共同体の「合理性」^{エコノミ}に奉仕するだけのものに過ぎない。であるならば、主体の「死」の介在こそが、他者としての「言葉」の条件なのだ、と言うべきだろうか (25)。

得意のエログロ・スラップスティックの体裁の中に、川上弘美、宮崎駿らのテキストを用いて「未来の死者」への応答不可能性の問題を論じる「震災文学論」を挟み込んだ高橋源一郎「恋

する原発」(『群像』二〇一一・一一、後に『恋する原発』講談社、二〇一一・一二)は、先に見たような二〇一一年三月以降の加藤の批評的営為と、問題意識をかなりの範囲において共有しているように見える。しかし、高橋は、「言葉」の失調から回復するために「暖かい」「関係」の「固有性」を奪還しようとはしない。

しばらくすると、国際赤十字の車が進んで来るのが見えた。車は止まり、知らない男が、社長にいった。

「ジャーナリスト？」

「……通りすがり……」

「関係ないやつはさっさと出て行け！」

「……どう行けば……」

「あっち！」

社長は、赤十字の男が指さす方向に走った。そして思った。おれ、関係ないやつだったのか!!

作家かジャーナリストなら、書くことができた。写真家なら、写真を撮ることができた。テレビ局のクルーならビデオカメラを回すことができた。だが、社長は、なんの関係もない若い日本人にすぎなかった。(26)

今はアダルトビデオ制作会社の社長に納まっている男の原風景とも言える経験が回想される場面である。ペイルートにいて「あること」をしていた彼は、そこにいらなくなつて、イスラエル軍の制圧下にあった難民キャンプにさまよい出る。そこは、恐ろしい数の死体があちこちに転がる地獄のような場所であつた。しかし、彼はそこからすらも「なんの関係もない奴」としてはじき出される。地獄は彼に意味をもたささない。彼は食事をとることもできなくなり、殆ど死んだようになって道ばたに転がつていた。その彼を全くの死体とみなした女が、彼の目の前で排泄をする。それに異様な食欲をそられた彼は、生気を取り戻し、アダルトビデオ会社の社長になつた現在まで、熱烈なスカトロロジーの信奉者であり続けている。

ここでの「アダルトビデオ」が、文学の喩であることは誰の目にも明らかだろう。「あること」からも難民キャンプからも「関係ないやつ」としてはじき出され、当事者的な主体が死に絶えた場においてもたらされる排泄物Ⅱ「言葉」には、何の意味も充填され得ず、そこに宛先があらかじめ書き込まれているわけでもない。しかし、そのような他者としての「言葉」の受取人になることで、彼は「地獄」から抜け出るのだ。その行き先が、理想的な「天国」などでは決してなく、また異なる「地獄」に過ぎないとしても、である。

注

- (1) 斎藤環、岩波書店ウェブ連載「3・11を心に刻んで」
(<http://www.iwanami.co.jp/311/> 二〇一一年・五・一一更新、
後に岩波書店編集部編『3・11を心に刻んで』、岩波書店、
二〇一二・三)
- (2) 大塚英志「神戸震災文学論」(「蜂蜜パイのように甘い」お
話」をけれども今は肯定するべきだということについて―村上
春樹と車谷長吉」として『文学界』、二〇〇〇・八、後に大塚「サ
ブカルチャー文学論」、朝日新聞社、二〇〇四・二)
- (3) 斎藤環「言葉・空間・祈り」(「震災と文学3 言葉・空
間・祈り」として『小説トリッパー』二〇〇六年秋季号、改稿
の後斎藤『文学の断層 セカイ・震災・キャラクター』、朝日
新聞出版、二〇〇八・七)
- (4) 無論、こうした見立ての背景には、中村光夫『風俗小説
論』(一九五〇・六)がある。
- (5) ツェランとアドルノとが持った文学史的な接点について
は、関口裕昭『パウル・ツェランとユダヤの傷 ―《間テクス
ト性》研究』(慶応義塾大学出版会、二〇一二年・七) 参照。
- (6) テオドール・アドルノ「アンガー・ジュマン」(Engagement
初出一九六二・三、引用は三光長治ほか訳『アドルノ 文学ノー
ト2』みすず書房、二〇〇九・九)
- (7) こうの史代「外側の人へ」(前掲岩波書店編集部編『3・

11を心に刻んで」

- (8) 原爆の記憶とその継承をテーマにしたこのの代表作
『夕風の国 桜の街』(双葉社、二〇〇四・一〇)について、そ
の〈被爆〉表象のナイーブな受容のあり方を指摘する川口隆行
「メディアとしての漫画、甦る原爆の記憶―このの史代『夕風
の街 桜の国』試論―」(『原爆文学研究』、二〇〇五・八)は、
既に符牒と化した、語り得ぬ〈トラウマ〉の類型的な表象が脱
歴史的な記憶の再編に加担する可能性に言及している。
- (9) <https://twitter.com/amaotom/status/2418582530913894>
き。なお、ツイッターアカウント名は引用の趣旨に即して伏せた。
- (10) マイケル・サンデル『マイケル・サンデル 大震災特別
講義 私たちはどう生きるのか』(NHK出版、二〇一一年・五)
- (11) こういったコミュニティ「ジモト」に新たな共同体の可
能性を見ようとする鈴木謙介は、震災後の社会についても同様
の見通しを語り続けている(鈴木謙介「ジモト、ナナメの関
係、趣味縁：「承認の共同体」から生まれる、若者による民主
主義」、河合塾編『ポスト3・11 変わる学問 気鋭大学人か
らの警鐘』、朝日新聞出版、二〇一二・三)。
- (12) 宇野常寛『ゼロ年代の想像力』(早川書房、
二〇〇八・七)
- (13) 「当事者」という用語については、エージェント
agent、エージェンシー agency の訳語として「ある現象につ

いて関わりを持つ限りにおいて構成される主体のあり方、その主体性」として理解されることが多く、従って「当事者主体」等として subject あるいは subjectivity の意を含んで用いられることもあるが、本稿においては、ステークホルダー stakeholder、利害関係者の意味をもそこに加えて込めたい。これは、後に引用する佐々木俊尚の用語法にほぼ重なっている。

(14) こうしたメタレベルの存在は、これに続く部分で（それとは明示されずに）引用される村上春樹の初期のテキスト解釈において類型的に指摘されるものでもある。その解釈と戦後文芸批評史との関わりについては拙稿「ポスト六〇年代作家としての村上春樹 —「1973年のピンボール」試論—」（『日本文芸論稿』、二〇一・二）参照。

(15) 笠井潔「社会領域の消失と『セカイ』の構造」（『小説トリッパー』二〇〇五年春季号、後に『探偵小説は「セカイ」と遭遇した』、南雲堂、二〇〇八・一一）

(16) 一九六〇年代の「政治と文学」論争において「文学」の外部を巡る問いが広く共有された状況については、拙稿「一九六〇年代日本浪漫主義文学論のために」（『山形短期大学紀要』、二〇〇八・三）を参照。

(17) 前掲佐々木『『当事者』の時代』

(18) 前掲佐々木『『当事者』の時代』

(19) 加藤典洋「死に神に突き飛ばされる——フクシマ・ダイイ

チと私」（『一冊の本』二〇一一・五、後に加藤『3. 11 死に神に突き飛ばされる』、岩波書店、二〇一一・一一）

(20) 加藤典洋「戦後思想 そのポストコロナリアルな側面」（山口県立大学講演二〇一二・三・四、『加藤ゼミノート』二〇一二・三、後に加藤『ふたつの講演 戦後思想の射程について』、岩波書店、二〇一三・一）

(21) 加藤典洋「戦後、リスク近代、有限性 三・一一以後をどう捉えるか」（東京工業大学「人間学講座」講演二〇一二・五・一四及び五・二八、『三・一一以後を考える——戦後、リスク近代、有限性 第一日目 三・一一以降をどう捉えるか』加藤ゼミノート二〇一二・五及び『三・一一以後を考える——戦後、リスク近代、有限性その2』加藤ゼミノート二〇一二・六、後に前掲加藤『ふたつの講演 戦後思想の射程について』）

(22) こうした核を巡る想像力が、晩年の三島由紀夫における「知的概観的」世界観及び文化論の中核をなしていたことは、柳瀬善治が繰り返し指摘している。柳瀬『三島由紀夫研究 「知的概観的な時代」のザインとゾルレン』（創言社、二〇一〇・九）、柳瀬「『知的概観的な時代』の「表現行為」について——三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える」（『原爆文学研究』、二〇一〇・一二）などを参照。

(23) 前掲加藤「戦後、リスク近代、有限性 三・一一以後を

どう捉えるか」

(24) 酒井直樹「戦後日本における死と詩的言語」(テッオ・ナジタ、前田愛、神島二郎編『戦後日本の精神史 その再検討』、岩波書店、一九八八・一二、後に酒井『日本思想という問題 翻訳と主体』、岩波書店、一九九七・三)

(25) フランス文学者阿部宏慈が指摘する次のような表象の「傷」は、「必要性」や「意味」によっては覆い隠すことのできない「抵抗感」として理解することができる。しかし、「私」と「犠牲者たち」との関わり、すなわち「私」の当事者性の消去、「私」という主体の「死」において発生するその表象の「傷」は、それ故に「私」を捉えて離すことのない他者性を持つ。

第二の破局、それはアウシュヴィッツでの大量虐殺を指すのですが、その単一性、類例のなさ、他との比較を拒絶するものであるとして、そのことは前提として受け入れたうえで、なお私たちは、私たちの生きてあることについての不安、それを肯定しようとするどんな主張も単なるおしゃべりに見えるということ、そうした主張は犠牲者たちに対する不当な行為であるという抵抗感において、少なくともリスボンの地震以降を生きたひとびとと感覚を共有する部分があると言いたいのです。

それは、震災とそれに踵を接して起きた原発事故が、私たちを、いやあえて私をと言いましょう、あなた方を巻

き込む必要はない、私を軽度の鬱状態に陥れ、そこからどうしても抜け出ることができないままにここに立ってしまったからかもしれない。それでも、いたずらに希望を語る人々や、たとえば被災地の子供たちの目がどれほどきらきらと輝いているかを語るレポーターの声に、違和感を覚えすにはいられないのです。そのことは、記録することの必要性や伝えることの意味を掲げて映像を提示する側と映像を繰り返し見ないではいられない私たちの共犯関係にも結びつくでしょう。誰が一体、これらの映像を、心に傷を負うことなしに直視しうるでしょうか。そしてまた、心に傷を負ったからこそ、それらの映像を繰り返し見ないではいられないのです。映像はそのとき傷として現れます。触れればひりひりと痛む傷。スクリーンの上に投影された、私たちの内なる傷。

(阿部宏慈「傷跡の彼方に」、今福龍太・鵜飼哲編『津波の後の第一講』、岩波書店、二〇一二・二)

(26) 前掲高橋「恋する原発」

**‘Words’ with Alterity: A Preliminary Analysis of the Relationship
between Post-World War II Literary Criticism and Post-Quake Japan**

MORIOKA Takashi

In his discussion of the Great East Japan Earthquake of 2011, Tamaki Saito highlights the implications of what he terms ‘verbal ataxia.’ According to him, verbal ataxia is coterminous with various currents and trends of post-WWII Japanese literary criticism while, meanwhile, it has now emerged as the crux of the symbolic order that underlies human communication in post-quake Japan.

This paper has two aims. Firstly, to clarify the historical context behind a literary criticism where ‘literature’ and ‘reality’ are intertwined; secondly, to appraise verbal ataxia as an element that suppresses the human mind as a moral agent. The focus of my analysis is Genichiro Takahashi’s *Koisuru Genpatsu*, along with critiques by Toshinao Sasaki and Norihiro Kato.